

フラッグフットボールの体育授業満足度と運動参加意図に関する研究 ～川崎市の小学生に着目して～

A Study of Flag football PE class Satisfaction and Playing intention The case of elementary school students in Kawasaki City

スポーツビジネス研究領域

5011A007-9 飯塚 啓太

研究指導教員：原田 宗彦 教授

1, 本研究の意義

本研究は、日本においてマイナースポーツであるアメリカンフットボールの普及と発展に貢献することを本研究の意義とする。松岡（2012）は、フラッグフットボールが小学校で普及していくのに伴い、「小学校でフラッグフットボールをはじめ、中学校でタッチフットボールを行い、そして高校や大学でアメリカンフットボールを行う」という流れが徐々にできつつある。と述べており、フラッグフットボールは、アメリカンフットボールやフラッグフットボールの普及発展や裾野の拡大において重要である。

したがって、本研究ではアメリカンフットボールを活用したまちづくり取組指針を行っている川崎市内の小学校で行われているフラッグフットボール体育授業を研究対象とし、フラッグフットボール体育授業満足度と運動参加意図に関する研究を行うこととする。

2, 研究背景

フラッグフットボールとは、通常のアメリカンフットボールから危険なタックルなどの身体接触プレーを取り除いた攻守混合の陣取りゲームであり、アメリカンフットボールの戦術的な醍醐味を、自分たちでルールや作戦を考え、工夫していくことができる運動である（星尾, 2006）と述べており、フラッグフットボールとアメリカンフットボールには関係性があることが明らかである。平田（2011）は、フラッグフットボールの教材としての価値について、①フラッグフ

ットボールは、試行錯誤をくり返ししながら、作戦をつくり、練習をする過程で、友達と協力することの大切さが分かり、「チームワークの大切さ→友達と協力することの大切さ」を教えることが出来る。②「友達の作り方（対人関係能力）」を「具体的」に教えることができ、学級経営・生徒指導にも役立つという点で、教材価値が高い。と述べており、本研究対象である川崎市内の小学校体育授業においても積極的に導入されている。その一方で、小学校体育授業を行うにあたって、フラッグフットボールを教えることのできる小学校教員がほとんどいない現状である。したがって、フラッグフットボール授業改善のためにフラッグフットボール特有の授業評価表を作成し、授業満足度の向上をはかる必要がある。

3, 先行研究の検討

体育授業評価に関する研究において、高田ら（2000）は、授業評価法作成を目的とし、因子分析を行い「まなぶ」「できる」「たのしむ」「まもる」のそれぞれの因子で5項目ずつ、計20項目の質問項目が小学校、中学校、高校、大学の各学校段階別にそれぞれ抽出した。

授業評価と授業満足度に関する研究において、牧野（2001）は、授業内容と教員の授業態度が学生の満足度に大きな影響を与えると結論づけており、授業評価と満足度に関して因果関係があることを明らかにしている。

運動参加意図に関する研究において、藤田ら

(2007) は、学校卒業後、自ら運動へ参加する者は、体育授業に対して肯定的な運動経験を有することが推測されると述べており、運動参加意図に関して体育授業の重要性を明らかにしている。

4. 研究の目的と方法

本研究は、①フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の開発、②フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度とフラッグフットボール体育授業満足度の因果関係を明らかにする。③フラッグフットボール体育授業満足度と今後のフラッグフットボール参加意図の相関関係を明らかにする。を本研究の目的とする。本研究の対象として、川崎市立小学校の中で 9 月から 11 月に期間にフラッグフットボールの授業を行ったことのある小学 4 年生 259 名、小学校 5 年生 80 名、計 339 名を研究対象とし、先行研究(高田ら、2000) (藤田ら、2007) をもとに作成した質問紙を用いて質問紙調査を行い、339 名全員から有効回答が得られた。

5. 結果

本研究ではまず、フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度を開発するため探索的因子分析を行った結果、先行研究と同じ「まもる」、「まなぶ」、「たのしむ」、「できる」の 4 因子構造となり、12 項目の質問項目が抽出された。続いて、抽出された尺度の信頼性の検証をするため、クロンバック α 係数の算出を行った結果、 α 係数は.89 となり、尺度の信頼性があると判断した。

次に、フラッグフットボール体育授業の授業評価に関する 4 因子 12 項目からなる授業評価尺度とフラッグフットボール体育授業の関する授業満足度との因果関係を検討するため、授業評価尺度を独立変数、授業満足度を従属変数とした重回帰分析を行い、因果関係を明らかにした。重回帰分析の結果、採択されたモデルにおいて、授業満足度に対する調整済み決定係数は.30 ($p<.01$) であった。また 12 項目からなる授業評

価尺度の内、たのしむ因子に存在する「Q24：仲良くなるチャンス」と「Q6：楽しく勉強」の 2 項目に関してのみ、標準偏回帰係数がそれぞれ 5% と 1%水準で授業満足度に対して正の方向で有意であった。また、開発された授業評価尺度に存在する各因子の合成得点を独立変数、授業満足度を従属変数とした重回帰分析を行い、採択されたモデルにおいて、授業満足度に対する調整済み決定係数は.30 ($p<.01$) であった。また存在する 4 因子の内、4 項目から構成されるまなぶ因子と 2 項目から構成されるたのしむ因子の 2 因子に関して、標準偏回帰係数がそれぞれ 5%と 1%水準で授業満足度に対して正の方向で有意であった。

最後に、授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係を明らかにするために相関分析を行った。相関分析の結果、授業満足度とフラッグフットボール参加意図の相関関係において、フラッグフットボール参加意図に関する 3 項目すべてにおいて 1%水準で有意であった。また有意であった 3 項目すべてにおいて相関係数.40 以上を示し、正の相関が明らかとなった。

6. 考察

本研究では、フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度を開発し、授業評価と授業満足度との因果関係及び授業満足度とフラッグフットボール参加意図との相関関係について定量的に把握することが出来た。結果として、フラッグフットボール体育授業の授業評価をもとにした授業満足度とフラッグフットボール参加意図の関係性における示唆を得た。研究の限界として、①フラッグフットボール体育授業の授業評価尺度の再検討の必要性、②授業評価と授業満足度の因果関係モデルの再検討の必要性、③研究対象の選択、④小学生を対象とした質問紙調査、があげられる。